

行政・司法各部門の支部図書館と専門図書館の連絡情報誌

びぶろす—Biblos

94号 (令和4年8月)



特集：山

【特集：山】

日本が誇る「山岳図書館」

日本山岳会図書委員会 委員長 神長 幹雄

1 図書室の歴史

公益社団法人日本山岳会の図書室の歴史は、会室（ルーム）から始まったといわれている。1929年11月、東京・虎ノ門の不二屋ビルに初めてクラブルームができ、松方三郎¹、藤島敏男²ら先人たちの尽力によって図書室が設けられたという。ちなみに日本山岳会は創立1905年、日本で最も古い山岳会である。その後、虎ノ門の会室は戦災で焼け、1949年にはお茶の水に山小屋風の図書室が設けられた。15年続いたこの会室も、諸般の事情から数回にわたって移転を繰り返し、現在の麹町にあるマンションの一室に落ち着いている。JR市ヶ谷駅から徒歩10分弱というアクセスのよさと利便性から、首都圏の会員にとってはありがたい存在となっている。こうした図書室を支えてきたのが、初期の図書委員会の方々であった。なによりも図書への愛着が強く、資金的にも人的（マンパワー）にも支援をしつづけてくれた。そうした図書委員会委員の先輩は何人もいる。作家の深田久弥、山岳史研究家の山崎安治、登山家の望月達夫、日本隊にとって長年の目標としたマナスル初登頂の隊員だった松田雄一、そしてつい最近鬼籍に入られた作家の近藤信行など、錚々たる顔ぶれがそろろう。彼らが率先して図書室を支えてくれたおかげで、日本山岳会の歴史とも重なり活動を継続させることができたのである。

2 図書室の概要

まず、日本山岳会の図書室の紹介からはじめよう。図書室は、千代田区麹町のマンションの一室にあり、手前に閲覧室が、奥に書庫が並んでいる。書庫は手動による移動式の書架が何層にも並び、手前には、個人名がついた書籍がガラス棚に所蔵され保存されている。ヒマラヤ、中央アジア関係の洋書を集めた「望月達夫文庫」、主に国内の地誌、登山史関係が中心の「山崎安治文庫」、初版本や特装本・限定本が多く、海外の貴重な古典も多い「磯野計蔵文庫」など、個人の寄贈による図書は特に貴重なものが多い。

利用方法は、原則開架式の自由閲覧である。蔵書は、日本山岳会のホームページ上で公開されており³、非会員でも会員の紹介があれば、会員と同様、自由に閲覧することができる。紹介者のいない非会員でも、あらかじめ希望図書を予約すれば、予約日時に図書を閲覧でき、「開かれた図書室」が基本方針となっている。1枚5円でコピーもできる。

司書の資格を持った事務局の担当者が在室してこうした図書の管理を行い、図書委員会の委員がボランティアで運営に当たっている。

* 本稿におけるインターネット情報の最終アクセス日は、2022年8月19日である。

¹ 編集注：松方三郎（1899-1973）は大正・昭和時代の登山家、ジャーナリスト。1970年エベレスト登山隊長として松浦輝夫、植村直己の両隊員による日本隊初の登頂を成功させた。日本山岳会会長、日本山岳協会会長。著作に『アルプス記』など。

² 編集注：藤島敏男（1896-1976）は大正・昭和時代の登山家。第一高等学校在学中から登山に親しみ、1935年から銀行員としてパリ駐在の3年間にアルプスの山々を登った。1965年日本山岳会名誉会員。著作に『山に忘れたパイプ』。

³ 日本山岳会図書室蔵書検索サービス <https://sv1.opac.jp/aop/cgi-bin/index.cgi?LibId=015kmrt>

3 蔵書の内容

日本山岳会の図書室は、ヒマラヤなどの山岳地や極地に特化した書籍が多く、その分類方法、蔵書の数からいっても、日本随一の「山岳図書館」といって差し支えないであろう。

蔵書の内容は、国内外の山岳関係図書を中心にして探検・冒険関連の図書までに及び、山に関する専門図書館であるといえる。具体的な内容としては、事典・解説、目録・解題、登山史、遭難報告、自然・環境保護、山岳宗教、地域伝説・地誌・民俗学、気象、地形、動植物、登山医学・医療、技術書（登山・岩登り・アイスクライミング・スキー・沢登り・釣り・野外活動）、芸術書（絵画・写真・歌）、料理本、個人エッセイ、遠征報告書など、それぞれ山岳に関する多種多様な書物が集められている。また他団体の資料、たとえば内外の山岳団体の年報・会報・記念誌、日本山岳会地方支部（全国に33支部）の会報・記念誌など、通常ではなかなか手に入りづらい図書も保管している。

こうした蔵書が、和書で約1万2,000冊、洋書で約3,000冊にのぼる。先に記した個人文庫では、山崎文庫が277冊、望月文庫が250冊、そして磯野文庫が182冊にのぼる。このほか、学校山岳部、ワンダーフォーゲル部の部報などが165タイトルほどある。

そこで図書の分類方法であるが、通常、図書の分類は国内図書館では「日本十進分類法(NDC)」が一般的だが、蔵書が「山」に特化した日本山岳会の場合、このNDCでは偏りが生じて分類にならない。そのためこれまでいくつかの試行錯誤を繰り返して、現在の日本山岳会独自の分類法に定着してきた。まず書籍内容を「地域別」と「テーマ別」に大きく二分し、そこから各項目に細分化された計4桁の数字で表示している。

4 蔵書の特徴

図書室の書籍は、そのほとんどが会員からの寄贈によって成り立ってきた歴史がある。貴重な古典や洋書には特にその傾向が強い。こうした和書の古典と洋書は、日本山岳会の図書室の最も特徴的な蔵書となっている。

特に稀覯本では、高頭式著の『日本山嶽志』初版本や小島烏水著の『アルピニストの手記』初版本など、大変珍しい書籍を所蔵している。またヒマラヤ、カラコルム関係の洋書もほぼそろっていると云ってもよいだろう。こうした洋書の数々は、質・量ともにほかの図書館ではまず見られないはずである。

それと同時に、世界各地の山岳会の会報も充実している。特にイギリスの『アルパイン・ジャーナル』やインドの『ヒマラヤン・ジャーナル』はもちろんなこと、アメリカ、スイス、イタリア、ドイツ、カナダ、ニュージーランドなど各国の会報がそろっているのも日本山岳会ならではのことであろう。イギリスの王立地理学会の『ジオグラフィカル・ジャーナル』も、戦後発行の号は現在までほぼそろっている。

5 受け入れ図書と廃棄図書

毎年、図書委員会では、十分ではないが予算が計上されて、その範囲内で図書を購入している。購入図書には、入手困難な私家版や、新刊の洋書、年間購読の洋雑誌なども含まれるが、その数はそれほど多くない。基本的には、書籍も雑誌・会報類も、寄贈された図書を中心に成り立っている。

図書委員会では、月に1度、定例の委員会を開き、新刊図書をチェックし、納本希望図書があれば版元に依頼して寄贈してもらっている。しかし、当然のことながら、すべての希望図書が寄贈されるわけではない。その点、既刊、新刊ともに欠本が生じるのは残念なことである。

特に最近では、会員の高齢化に伴い、物故会員の家族から寄贈図書の照会、依頼を受けることが多い。図書に関心のない家族にとっては、書籍ほどスペースをとる「無用の長物」はないであろう。本来ならそうした書籍も受け入れたいところだが、現実には収蔵スペースに限りがあり、原則として断らざるを得ない。ただ、創刊後から継続して発行されている図書や雑誌の寄贈は、重複図書でない限りなるべく受け入れることにしている。

一方、図書の廃棄については、基本的には行っていない。不要と思われる図書は、「重複本」と「旧刊のガイドブック類」などで、特に重複本は、地方支部やほかの山岳団体に打診し、希望があれば寄託または寄贈するようにしている。

「古いガイドブック・地図類」は、内容によってはあえて保存しているものもある。そうした古い資料は、そのまま利用されてしまうと道迷い遭難や滑落遭難の原因になりかねないため、箱詰めしたまま保管している。

6 図書委員会の役割

図書委員会は、国内随一の山岳専門の図書室として、よりいっそうの充実を図るべく図書室の管理・運営を行なっている。最近のコロナ禍で滞ってしまったが、山岳会特有のいくつものイベントもこれまで積極的に展開してきた。

「山岳史懇談会」は、登山史にまつわる出来事、たとえばナイロンザイル事件⁴やRCCII⁵の創設など、直接の関係者から話を聞いてきた。「山岳図書を語るタベ」は、たとえば山の文芸誌『アルプ』の終刊号の話など、山岳図書にまつわるエピソードを聞く会を開催し、歴史を次世代に語り継ぐことを主要な目的としてきた。

一方、「図書交換会」も、山岳会固有の催しとして定着してきた感がある。例年、年次晩餐会に集まってくる全国の会員を対象に、会員から供出された山岳書を会員同士で抽選によって交換し合う長い歴史に支えられてきたイベントだ。図書の有効利用のために、今後も継続させていきたいと思っている。ほかに、機関誌『山岳』⁶や会報『山』⁷の図書紹介を図書委員会を担当し、山岳図書や山岳文化の魅力を幅広く伝える活動をしている。

7 近年の問題点と今後

日本山岳会の図書室はすでに飽和状態となり、蔵書スペースの確保が喫緊の課題となっている。蔵書を配架することも難しくなっているのが現状で、早急な対処を考えなくてはならない。書棚に置けなくなった図書は、検索されることもなく、最悪の場合は紛失する可能性もある。

山岳会に限ったことではないが、会員の高齢化により、図書の保管がままならず、貴重図書が古書店に流出したりゴミとして廃棄されたりするケースも散見されるようになってきた。山岳団体の情報を交換しながら対処法を考えたいと思わないと思うが、これも緊急の課題

⁴ 1955年、ナイロン製のクライミングロープの切断が原因で起きたクライマーの死亡事故

⁵ 戦前、存在した日本初のロッククライミングの同人を、その考えを継承・発展させる目的で、1958年創立された登山家による同人組織

⁶ 当会ホームページでバックナンバーを公開している。 https://jacl.or.jp/document/sangaku_back_number

⁷ 同上 https://jacl.or.jp/document/yama_back_number

題である。本来であれば山岳会の図書室が、そうした図書の受け皿になるべきであろうが、現状ではほぼ不可能となっている。

社会全体の電子化への要請も、今後の課題と言えるだろう。電子化自体は奨励されるべきであるが、個別の問題点がいくつかある。山岳会の場合、海外の登山隊の報告書なども集めているが、最近ではネット配信のみに変り、紙で出版されなくなってきた現状がある。そこにコロナ禍が追い打ちをかけている。日本国内でも海外でも、各団体の資金難から、年報・月報の中断・廃刊、または電子配信のみへと変わり、紙媒体として記録が残らない可能性も出てきている。国内外の資料ともに欠号が続出しているのである。

いずれにしても、図書が消えていく現状はなんとかしなくてはいけない。電子媒体だけでは重要な記録として残らない可能性があり、記録が残らなければ次世代に引き継がれる文化の伝承もままならないからだ。

ただ最近、図書委員会では、「図書館めぐり」と称して、特徴のある図書館をまわり、レクチャーを受けながら情報交換をする試みをはじめた。ある大きな県立図書館では、地方の特色をいかし、地域のネットワークを構築するとともに、子どもたちに積極的に図書館を利用してもらう方策を指向するなど、斬新なアイデアを駆使して将来像を模索していた。書籍も図書館も苦難の時代を迎えつつあるが、いくつかの新しい試みには一縷の希望を見出せるようにもなってきた。このような試みも参考にして、今後、山岳会図書室も、記録を次世代に引き継ぐ方策を検討していきたい。



日本山岳会図書室内部

(かみなが みきお)